様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月　９ 日現在

機関番号：３１２０３
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2018～2023
課題番号：１７ＫＫ００２２

研究課題名（和文）先史時代イメージの分析による考古学・博物館学への内省的アプローチ

研究課題名（英文）Reflexive Analyses to Prehistory Images, Archaeological Practices, and Museums

研究代表者
吉田　泰幸（Yoshida, Yasuyuki）

盛岡大学・文学部・准教授

研究者番号：２０５８５２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,200,000円
渡航期間：　10ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は各地の博物館展示（野外博物館を含む）や様々なメディアにみられる先史時代の復元イメージの成り立ち、変遷を科学史、社会史と関連づけながら検討した。先史時代復元イメージ変遷の見取り図を描くには新たな考古学的発見との関係だけでなく、先史時代人イメージにおいては特定のイメージのグローバルな流布と借用現象、復元建物においては近代社会のアイデンティティとの関わりが重要であることを指摘した。「縄文」と発話する人々がそれぞれに何かを仮託した概念としての「縄文イメージ」の変遷についてもその見取り図を更新し、日本の考古学・博物館学の「内省的転回」に関してその実証的・理論的な基盤構築を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は考古学史・博物館史研究の一部であり、これまでの同研究が研究対象として頻繁には扱われてこなかった先史時代復元イメージの成り立ちと変遷を科学史、社会史と関連づけながら検討し、その見取り図を更新した。同時に「縄文」と発話する人々がそれぞれに何かを仮託した概念としての「縄文イメージ」も先史時代イメージとして位置付け、思想史と関連付けながらその見取り図も更新した。それらが国際的な研究動向も参照しつつ、他分野と関連付けてなされたことに学術的意義がある。また、本研究は博物館展示等の先史時代表象を介したコミュニケーションを改善する端緒になり得ると考えており、それが社会的意義のひとつである。

研究成果の概要（英文）：This research project examines transitions in prehistoric reconstructed images and the broad meanings of prehistoric images. Firstly, it updates a framework for how images of prehistoric people and prehistoric architecture in Japan developed from the beginnings and up to the present from the comparative perspective between archaeology, anthropology, science history, social history, and history of thought. Secondly, it outlines how “the Jomon”, a flexible symbol inspired by the Japanese prehistoric Jomon period, stimulates current social movements. Those outcomes contribute to empirical and theoretical foundations towards the reflexive turn of Japanese archaeology, museum studies, and cultural heritage studies. This project was undertaken in international and inter-disciplinary circumstances, indebted to visiting researcher programs at collaborating institutions.

研究分野：考古学、文化遺産学

キーワード：復元　イメージ　先史時代　考古学　表象　思想史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は基課題研究「先史時代人はどのようにビジュアライズされるのか: 日本列島を例として」（課題番号: 17K01208、2017-20 年度、以下、基課題研究）からの発展研究である。基課題研究開始後、明確になった課題は以下の二点である。

一）教科書の挿絵・学習マンガにみられる先史時代人イメージの分析からは、1950 年代には半裸の原始人イメージが定着したことがわかり、現在でも影響力がある根強いイメージの出発点をつかんだかにみえたが、それらは欧州の石器時代復元画を参照した可能性も考えられ、先史時代人イメージの分析を行うには日本国内の動向を探るだけでは不十分である。

二）「戦前・戦中は神話の時代とされていた遠い過去の人類史が、戦後は先史時代として歴史の一部となり、戦後における半裸の原始人イメージ普及の背景には、唯物史観に基づく発展段階論や社会進化論の受容がある」というのが基課題研究で得られたみとおしだが、これは通俗的な理解を超えていない。唯物史観や社会進化論受容のプロセスを検討するには、考古学の動向を超え、日本近現代史や政治思想・社会運動史への理解が必要である。

一）の解決に国際的な視野が必要なのは明らかだったが、二）に関しても、課題解決に繋がる定点となるような研究成果が国内では僅少で、一定の国内的言説のパターンに収束しがちであることも明らかになってきた。基課題研究も日本考古学の Reflexive Turn（内省的転回）を加速・本格化させるものとして構想されたが、Reflexive Turn 後の英語圏における考古学的実践に対する見方の深い理解、国内言説の型に回収されにくい英語圏の Japan Studies（日本学）の視点を獲得することが基課題研究の分析に厚みをもたらすと考え、本研究「先史時代イメージの分析による考古学・博物館学への内省的アプローチ」が構想された。

２．研究の目的

本研究は、基課題研究に欧州考古学史、日本の近現代思想史、メディア史との接点を見出し、それによって広がる論点をもとに、１）基課題研究を日本の考古学・博物館学の“Reflexive Turn”／「内省的転回」を加速させる研究として昇華させる、２）国際日本学の中に考古学と近現代思想史の関係を考究する分野を確立する、この二つの目的を設定した。そのために、A) 欧州・日本考古学についての共同研究、B) 日本の視覚メディアについての共同研究、C)日本の近現代思想史・社会運動史についての共同研究を並行して進めることとした。

３．研究の方法

上述した本研究の方向性 A)、B)、C)におけるそれぞれの研究方法は、海外研究機関での滞在研究をとおして確立された。

A) 欧州・日本考古学についての共同研究: 海外研究機関 1・センイズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー（Simon Kaner）から、基課題研究での成果と欧州の先史時代人イメージの比較研究を行うために、当該分野の英語圏における第一人者の一人であるステファニー・モーサー（Stephanie Moser）の主著（Moser 1998）を参照することが提案された。また、先史時代イメージの検討対象として、野外博物館である遺跡公園の分析を加えることが提案され、訪問先のリストアップをおこなった。

B) 日本の視覚メディアについての共同研究: 海外研究機関 1・センイズベリー日本藝術研究所のニコル・クーリッジ＝ルマニエール（Nicole Coolidge Rousmaniere）から、A)の比較研究の基礎資料として、考古学・人類学関係資料の探索だけでは不十分であり、美術史や科学史に視野を広げることの重要性が示唆された。センイズベリー日本藝術研究所は恒常的に日本・東洋美術史の研究員が Robert and Lisa Sainsbury Fellow として在籍しており、かれらとの対話を通して近代初期に日本各地で行われた博覧会で掲出されたイメージ、科学雑誌におけるイメージの成立背景を分析することになった。

C) 日本の近現代思想史・社会運動史についての共同研究: 海外研究機関 2・オーストラリア国立大学日本研究所のサイモン・アヴェネル（Simon Avenell）から得られた示唆により、近代初期から活発化した国際交流とそれにともなう翻訳をとおした進化論受容のあり方について検討することになった。また、先史時代イメージといった場合、基課題研究で検討対象とした復元イメージだけでなく、アヴェネルと研究代表者の共通の関心事である「環境運動における参照点となる『縄文』」のような、「縄文」と発話する人々がそれぞれに何かを仮託した概念としての「縄文イメージ」もひろく検討対象にすることになった。

４．研究成果

海外研究機関での滞在研究では、基課題研究から広がった論点に応じた研究計画を策定することができたが、2020 年度から新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の地球規模での拡大の影響を受け、一部変更せざるを得なかった。そうした点も含め、以下に研究成果を記す。上記の A)、

B)、C)の相乗効果による成果として（１）先史時代復元イメージ変遷の見取り図の更新があり、C)として（２）「縄文」イメージの見取り図の更新がある。両者を通じて、日本の考古学・博物館学の“Reflexive Turn”／「内省的転回」に関して、一定の実証的・理論的な基盤の構築に寄与することができたと考えている。

（１）先史時代復元イメージ変遷の見取り図の更新

基課題研究の成果とステファニー・モーサーの主著（Moser 1998）の分析をもとに、研究展望「先史のイメージの図像学」（単著、2019 年）を『考古学ジャーナル』誌に発表した。この時点では、日本において 1950 年代以降に盛んとなった半裸の原始人としての先史時代人イメージの出自が追えないままだった。特に、1900 年代初頭から 1945 年の間の日本における先史時代人イメージ自体を探索できておらず、この期間がミッシング・リンクとなっていた。

海外研究機関での滞在研究が始まって間もないころ、フランス・パリの Musée de l'homme（人類博物館、以下 MH）にて大型企画展「Néandertal」（ネアンデルタール）が開催された。Néandertal 展は先史時代イメージに対しての Reflexive＝内省的な見方も盛り込まれたものだった。展示視察の成果も生かしつつ、学術誌『貝塚』に MH 特集を提案し、MH リニューアルオープン時のナタン・シュランガーによる批評文の翻訳（研究代表者担当）、現代美術家で歴史復元イメージ画家の安芸早穂子による批評文、研究代表者による批評文「翻訳者ノート−人類博物館か人間博物館か」（単著、2019 年）を掲載することができた。

2020 年に入り新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の地球規模での拡大の影響を受け、当初予定していた海外研究機関での研究活動、欧州現地での文献調査、博物館視察・分析、遺跡公園視察・分析、国際学会参加をキャンセルしなければならなかった。代替措置として、日本の遺跡公園における先史時代イメージの強力な媒体である復元建物に関する文化人類学者との共同研究、特に復元デザインを当時の社会状況に位置付けつつ批判的に検討する研究を進めた。その検討は欧州の中心的な実験考古学会・EXARC でのオンライン発表“Approaches to Experimental Pit House Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology and Ethnology”（共同、2021 年）に繋がり、同会のウェブ・ジャーナルおよび機関誌『EXARC Journal Digest』にも発表と同タイトルの論文が掲載され（共著、2021 年および 2022 年）、同発表・論文の日本語版「中部高地の縄文竪穴建物復元と建築史、コミュニティ考古学、民族考古学」（共著、2022 年）も学術誌『比較文化研究』に発表することができた。この方向性においては、日本各地域の復元建物の集成とそれぞれの地域のトピックを取り上げた批評文の組み合わせで構成された論文の発表を紀要『Hiyoshi Review of Social Sciences』にて継続している（“Survey of the Present Conditions of Prehistoric Architectural Reconstructions”シリーズ、共著、2022・23・24 年）。

先述の 1900 年代初頭から 1945 年の間の日本における先史時代人イメージ分析の欠落＝ミッシング・リンクを解決する手がかりとして、日本における進化論の受容史を検討することに糸口を求めた。国際日本学分野の論考や翻訳書（例: ゴダール 著、碧海 訳 2020）によって、近代日本、特に戦前における進化論受容をめぐる多様なアクターを再認識し、分析視点を更新することができた。これと海外研究機関で得られた示唆−博覧会で掲出されたイメージ、科学雑誌におけるイメージの探索−の相乗効果で、日本における 1900 年代初頭から 1945 年の間の考古学・人類学関係以外の出版メディアにおける先史時代人イメージのいくつかは、（Moser 1998）の最終章“Popular Presentations”で紹介されたイメージ、あるいはその借用であることが判明し、それら以外に流通、借用がなされた“Popular Presentations”も特定することができた。これにより先史時代人に関する復元イメージに関して、グローバルな借用も含む包括的な文化史を描くみとおしを得ることができ、その一端は本研究期間終了の翌月に開催された考古学研究会第 70 回研究集会で発表した（吉田 2024）。

（２）「縄文」イメージの見取り図の更新

考古学と現代社会をテーマとしてセミナー開催、セミナー記録（吉田・Ertl 編 2017）の刊行後は、考古学全体に対する批評文（「過去を資源化する考古学の現在−政治、環境、芸術」、単著、2018 年）、「縄文」にインスピレーションを得た展示に対する批評（「書評: 長井謙治編『ジョウモン・アート-芸術の力で縄文を伝える』」、単著、2020 年）等の依頼原稿を商業誌や学術誌に発表し、それらの執筆をとおして基課題研究から広がった論点を整理することができた。これらの執筆は海外研究機関での滞在研究中におこなわれた。さらに、海外研究機関での多様なバックグラウンドの研究者との対話によって、滞在研究中には欧州考古学者会議（EAA: European Association of Archaeologists）において、“Making heritages towards AD2500: archaeology as reconnections to objects, heritage as remembering things”（単独、2019 年）と題した研究発表も可能となった。

本研究開始後は「縄文」と発話する人々がそれぞれに何かを仮託した概念としての「縄文イメージ」に関する映像作品と評することが可能な「縄文にハマる人々」（山岡信貴監督、2018 年）も公開され、滞在研究中にその紹介をアートと考古学に関する国際プロジェクト、“Materials, Artefacts, and Invisible Boundaries”の中で発表した（What is the Jomon: as an introduction of “Hooked on the Jomon”, On the film of “Hooked on the Jomon” and boundaries of Japanese Archaeology, いずれも単独、2019 年）。

この方向性での研究成果を国際学会・集会において英語で発表する機会が増えてきた中、2020

年以降は新型コロナウイルス感染症（Covid-19）の地球規模での拡大により予定されていた更なる機会が減少してしまった。そうした中においても、近年の「縄文」をめぐる話題の中でも最も論争的な『土偶を読む』（竹倉 2021）に関して、その対抗言説を超えて縄文研究の最前線を伝える『土偶を読むを読む』（2023 年）に批評文「考古学・人類学の関係史と『土偶を読む』」を掲載することができた。海外渡航が再開可能になってからはケンブリッジ大学遺産学センターで開催されたワークショップ、“The Value of Spirituality and heritage places in post-secular societies”において“’Jomon Pilgrimage’ and spirituality”（単独、2023 年）と題した発表を行い、そこでの成果も盛り込んだ批評文「縄文とスピリチュアリティ、考古学のスピリチュアリティ」（共著、2023 年）を『現代思想』誌に発表することができた。本研究期間中には人類学・考古学を超えて読者を獲得した“The Dawn of Everything”（Graeber and Wengrow 2021）も刊行されたが、同書での縄文時代に関する記述と「縄文イメージ」との関係について分析した論文「先史文化からの学びと縄文」（単著、2024 年）を『列島の考古学 III: 渡辺誠先生追悼論集』にて発表した。

基課題研究から広がった論点に応じた研究計画を策定し、海外研究機関での研究環境を生かした成果を公表し、日本の考古学・博物館学の“Reflexive Turn”／「内省的転回」に関して一定の実証的・理論的な基盤の構築を進めることができた。今後は本研究のそれぞれの方向性をさらに拡張して分析を進めるだけでなく、本研究の当初目標として掲げたものの、Covid-19 禍によってキャンセルや大幅な遅れが生じた国際ワークショップの開催、共同研究者との共著論文、共編著書刊行を進める必要がある。

＜引用文献＞

ゴダール, クリントン（碧海寿広 訳）. 2020. ダーウィン・仏教・神: 近代日本の進化論と宗教. 京都: 人文書院.

Graeber, David. and David Wengrow. 2021. The Dawn of Everything: A New History of Humanities. London: Allen Lane.

Moser, Stephanie. 1998. *Ancestral Images: The Iconography of Human Origins*. Ithaca: Cornell University Press.

竹倉史人. 2021. 土偶を読む: 130 年間解かれなかった縄文神話の謎. 東京: 晶文社.

吉田泰幸・John Ertl 編. 2017. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013‑2016. 金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.

吉田泰幸. 2024. 民族学-人類学-考古学的想像力の行方. 考古学の輪郭: 考古学研究会第 70 回総会・研究集会 講演・研究報告資料集. 考古学研究会 編. 28-35.考古学研究会: 岡山.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 Ertl, John, Yasuyuki Yoshida and Corey Noxon	４．巻 34
２．論文標題 Survey of the Present Conditions of Prehistoric Architectural Reconstructions in the Koshin-etsu Region of Japan	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Hiyoshi Review of Social Sciences	６．最初と最後の頁 1-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉田泰幸＋ジョン・アートル	４．巻 51(12)
２．論文標題 縄文とスピリチュアリティ、考古学のスピリチュアリティ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 93-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida	４．巻 33
２．論文標題 Survey of the Present Conditions of Prehistoric Architectural Reconstructions in Hokuriku and Tokai Regions in Japan	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Hiyoshi Review of Social Sciences	６．最初と最後の頁 21-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida	４．巻 32
２．論文標題 Survey of the Present Conditions of Prehistoric Architectural Reconstructions in Kansai, Chugoku, and Shikoku Regions in Japan	５．発行年 2022年
３．雑誌名 The Hiyoshi Review of Social Sciences	６．最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田泰幸・John Ertl	4．巻 32
2．論文標題 中部高地の縄文竪穴建物復元と建築史、コミュニティ考古学、民族考古学	5．発行年 2022年
3．雑誌名 比較文化研究	6．最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida	4．巻 2022
2．論文標題 Approaches to Experimental Pit House Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology and Ethnology	5．発行年 2022年
3．雑誌名 EXARC Journal Digest	6．最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida	4．巻 2021/4
2．論文標題 Approaches to Experimental Pit House Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology and Ethnology	5．発行年 2021年
3．雑誌名 EXARC Journal	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田泰幸	4．巻 50
2．論文標題 書評：長井謙治編『ジョウモン・アート-芸術の力で縄文を伝える』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本考古学	6．最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田泰幸	4．巻 75
2．論文標題 翻訳者ノート―人類博物館か人間博物館か	5．発行年 2019年
3．雑誌名 貝塚	6．最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ナタン・シュランガー（吉田泰幸 訳）	4．巻 75
2．論文標題 新・人間博物館、その歴史と進化	5．発行年 2019年
3．雑誌名 貝塚	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田泰幸	4．巻 721
2．論文標題 先史のイメージの図像学	5．発行年 2019年
3．雑誌名 考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田泰幸	4．巻 46(13)
2．論文標題 過去を資源化する考古学の現在―政治、環境、芸術	5．発行年 2018年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 114-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Yasuyuki Yoshida
2．発表標題 Jomon Pilgrimage’ and spirituality
3．学会等名 The Value of Spirituality and heritage places in post-secular societies（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Ertl, John and Yasuyuki Yoshida
2．発表標題 Approaches to Experimental Pit Dwelling Reconstructions in the Japanese Central Highlands: Architectural History, Community Archaeology, and Ethnology
3．学会等名 12th Experimental Archaeology Conference（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Yoshida Yasuyuki
2．発表標題 Making heritages towards AD2500: archaeology as reconnections to objects, heritage as remembering things
3．学会等名 25th Annual Meeting of the European Association of Archaeologists（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Yoshida Yasuyuki
2．発表標題 On the film of “Hooked on the Jomon” and boundaries of Japanese Archaeology
3．学会等名 Materials, Artefacts, and Invisible Boundaries（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshida Yasuyuki
２．発表標題 What is the Jomon: as an introduction of “Hooked on the Jomon”
３．学会等名 Materials, Artefacts, and Invisible Boundaries（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 渡辺誠先生追悼論集刊行会 編	４．発行年 2024年
２．出版社 六一書房	５．総ページ数 675
３．書名 列島の考古学III：渡辺誠先生追悼論集	

１．著者名 縄文ZINE 編	４．発行年 2023年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 432
３．書名 土偶を読むを読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
	ケイナー　サイモン (Kaner Simon)	セインズベリー日本藝術研究所・考古学・文化遺産研究センター・統括所長	
	クーリッジ・ルマニエール　ニコル (Coolidge Rousmaniere Nicole)	セインズベリー日本藝術研究所・現代視覚文化部門・研究所長	
	アヴェネル　サイモン (Avenell Simon)	オーストラリア国立大学・アジア太平洋学部・教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

United Kingdom	セインズベリー日本藝術研究所			
Australia	Australian National University			